



企業編



ヤンマー造船株式会社

武蔵町糸原3286-3
開設 昭和53年3月 従業員 105名

ヤンマー造船株式会社の大分事業部として、武蔵町に開設され、強化プラスチック

チック（FRP）製の漁船の製造を開始しました。生産の主体が漁船からプレジャーボート生産に移行したことで、平成14年7月には国内生産を大分へ集約し、本社工場となりました。

ヤンマー造船は、ヤンマーの100%出資のグループ会社で、ディーゼルエンジンを搭載したFRPボートの生産量では日本一を誇っています。

造船の工程は、FR



▲製造ライン

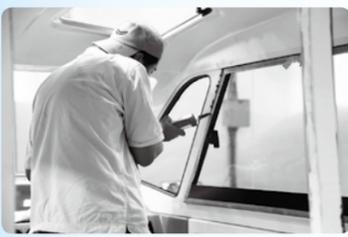
Pの素材を船の形に成形する成形加工部門、キャビンやデッキなどを取り付ける組立部門、エンジンや計器を取り付ける据付部門の3つに分かれており、そのほとんどが手作業の工程です。熟練を要する仕事ですので、1つの工程で一人前になるまでに数年間必要です。



▲型を使って部品を成形している様子

ヤンマー造船では、現在環境保護活動にも力を入れて取り組んでおり、その1つとして、ゼロエミッションの取り組みを実施しています。これは、工場から出るゴミが埋め立て処分場に行く割合を1%未満にする取り組みです。具体的な例としては、FRPの廃材をセメントの材料にリサイクルするなどです。

また、船以外の商品として、海水ろ過装置や浮き桟橋、水中網洗浄機など海洋で使用される機器の製造も行っています。そして、海に関わるものを作る会社として、人と海の豊かな関係作り貢献できる会社を目指しています。



▲強化ガラスをボンドで固定している様子



▲エンジンの据付

認定農業者編



▲左から信行さん、靖子さん、綱美さん

小玉 綱美さん
靖子さん、信行さん

安岐町下山口
広大な農地を家族で守り育てる

小玉綱美さんは、父の代から立木を買い付けて販売する林業と稲作の兼業農

家でした。しかし、住宅建設の低迷により、木材の需要が減少し、平成15年からは本格的に農業をすることに決めました。しかし、主に何を耕作すれば良いのかと模索する日々が続きました。そこで、東部振興局など関係機関に相談に行き、国東の気候や土壌に適した農作物について学びました。そして、米の他に小麦や大豆などの転作物を作るようになりました。

今では、総面積23ヘクタールの田畑に、麦18ヘクタール、大豆14ヘクタール、飼料用の米3ヘクタール、主食用の米5ヘクタールを栽培するようにになりました。これだけ広い作付面積を管理できているのは、妻の靖子さんと息子の信

行さんの協力があるからです。靖子さんは、「自分のところで採れた大豆で味噌を作るのが大好き。でも体がきつくなってきたので作付面積を減らしてほしいけど、夫は聞いてくれません」。

綱美さんは、「妻が作付面積を減らしたい気持ちには十分わかる。だが、地元営農組合の会長を10年以上上続けており、みんなに農地を荒らすなど頼んでいないのに、今自分が農地を荒らすわけにはいかない。この気持ちには、息子にも十分伝わっていると思う」。そして、信行さんは、「2人の気持ちには、いつも一緒に農作業をしているからよく分かっている。だから、仕事が休みになると、ここに自然と足が向いて手伝いをしています。これからは、自分が後を継いで、この地区の農業をしっかりと守っていききたい」と話していました。



▲法面を草刈りしている様子



▲大豆畑に農薬散布している様子

林業・水産業編



▲左から栄さん、直也さん、太樹さん

一丸 栄さん、直也さん
栗林 太樹さん

国東町治郎丸
平成5年から親子で始める

一丸栄さんは、子どもの頃よく泳いでいた治郎丸の海が懐かしくなり、45年前

に大阪の会社を辞めて漁師になりました。最初は、潜水漁から始め、定置網漁、アジ漁、太刀魚漁など徐々に広がっていきました。そのような中、息子の直也さんが高校を卒業し、漁師になると決意したことからは、20年前に新しい船を造りタコ漁に挑戦することになりました。

栄さん達は、タコ壺漁は4月から9月末まで、定置網漁は3月末から6月末まで、10月からは潜水業とタコ籠漁を行っています。漁



の最盛期は、タコ壺漁と定置網漁をする時期が重なる4月から7月上旬で、獲れたタコと魚を生きたまま出荷するため、夜中の12時に大分の市場に持って行きます。大分の市場から戻ったらそのまま午前4時にはタコ壺漁に出て、タコ壺漁が終わった午後3時から定置網漁に出るので、3時間しか睡眠時間がとれない時期が続きます。



昨年からは、タコ漁を始め、20年間のうちで、一番の豊漁の年となりました。そして、栄さんの娘婿の栗林太樹さんが、今年の4月から一緒に船に乗るようになりました。

太樹さんは、「義兄の直也さんに誘われて、海に魅力を感じて漁師になることを決めました」。直也さんは、「タコ壺漁は、エサ付け役、ロープを繰る役、タコ壺を繰る役の3人でするのが一番うまくいく。いつまでも父と一緒に漁に出てくれるわけではないので、後を継ぐためにこれから一緒に漁に出る相棒を探していました。2人で父に負けないような立派な漁師になりたい」と話していました。栄さんは、「2人が自分の後を継ぐために、一緒に船に乗って漁に出ることはとても嬉しい。だが、漁師の後継者を取り巻く環境は、厳しいものがあるので、自分が現役の間に、一人でも多くの若い人が漁師に憧れる環境づくりをしていきたい」と語ってくれました。



に話していただきました。栄さんは、「2人が自分の後を継ぐために、一緒に船に乗って漁に出ることはとても嬉しい。だが、漁師の後継者を取り巻く環境は、厳しいものがあるので、自分が現役の間に、一人でも多くの若い人が漁師に憧れる環境づくりをしていきたい」と語ってくれました。